

とある街のとある高校に、女の子達の悲鳴が響いた。

昼休みの時間帯、普段なら活気に満ちた校内に突如スライムのようなモンスターが現れた。ここが現実の世界である以上、生徒達が面食らうのも無理はない。すぐに逃げ出した生徒はともかく、非現実さに理解が追いつかない生徒も多くいた。

そして、反応が遅れた生徒から餌食になった。

「きゃあああ！」

廊下に現れたスライムが一人の女子生徒に向かって飛びついた。感触はぶよぶよした粘性の液体だが、触れた部分から服がブクブクと泡立ち、溶け出し始めている。

「いや！ 何これ！？ やだ、やめて！」

肌を隠すための上着やスカートがスライムの中で消化されていく。あっという間に服がボロボロになると、白いブラジャーとパンツが丸見えになった。

「いやあ！」

少女は手で隠そうとするが、スライムの中では動きが鈍る。その間にも下着も溶け出し始めていた。それに、逃げようとしていた少年達が気付いて目がくぎ付けになる。

「見ないで！ 見ないで！ 見ないでえ！」

だが、思春期の少年達にとって少女の裸を見る機会などそうそうない。乳首の先端や股間の毛を見て、ギャラリーから歓喜の声が漏れた。

「ひどい、ひどいよお」

女子生徒はもう涙目だ。これは強制公開ストリップショーに他ならない。それが今や学校のあちこちで行われていた。逃げたはずの男子生徒が話を聞いて、戻ってきてもいる。

それくらい彼女達の裸は新鮮だった。

クラスの好きな女子、胸が大きくオナニーのネタに使っていた女子、そんな彼

女達が嫌がる表情を浮かべて全裸にされているのだから当然だろう。

「助けてよお！」

一人がそう叫んだ時、突然校内放送のアナウンスが響いた。避難の放送かと思いきや、

『男子諸君！ どうでござるか、この光景は！』

それは全く聞いたことのない声だった。

『今頃、君達は女子達の全裸を目にしているだろう、触りたくてたまらないだろう、いやむしろ犯したくてうずうずしているはずでござる！』

それは確かにその通りだ。男子達の股間は怒張し、ズボンにテントを張っている。

『今なら何してもいいでござる！ 学校に結界を張ったから、外にはこの痴態は気付かれない！ 後から警察に言ったところで、スライムがどうのなんて誰も信じないなり！』

その言葉に男子達はお互いに顔を見合わせた。何してもいい、と言われたら思春期の猿である彼らを止めるものは存在しない。

一人が服を脱ぎ始めた瞬間、全員が下卑た表情を浮かべて女子に襲い掛かった。

「やだ！ まさか本当にする気なの！？ やめてえ！」

服がなくなった女子達はスライムから解放されると同時に、男子に組み敷かれた。ビンビンに勃起したペニスを見せつけると、彼らは次々と年若いマンコに無理やり挿入していく。

「いやああああ！」

響き渡る悲鳴。レイプ地獄の始まりだった。
そこに茫然としながらも駆けつける少女の姿がある。

「な、何なのこれ」

彼女はスライム討伐に現れた魔法少女——マジカル・ブルー。正体はこの高校に通う生徒、高橋青羽だが魔法少女であることを知られないために隠れて変身していたのだ。

その結果、登場が遅れて取り返しのつかないことになっている。

「や、やめなさい！」

彼女はステッキを振りかざして、次々と周囲のスライムを蹴散らした。

しかし、レイプに集中している男達にとっては蚊帳の外だ。この好機を逃してたまるかとガンガンに腰を突いている。

「あぐっ、うぐっ、ああうっ！」

「ひ、ひどい！ こうなったら動きを止め……、い、いや！」

犯している男達の勃起したペニスが目に入って、彼女は思わず目を背けた。

魔法少女という割には成熟した体を隠しているが、青羽はまだ男を知らない。そもそも十代の多感な時にＡＶのようなレイプ地獄を見るのは刺激が強すぎた。

「た、助け、あぐう！ いやあ！」

「……」

よく知っている顔が苦痛に喘いでいる。友達の痴態を見てしまった気まずさと恥ずかしさから、彼女は思わず教室の外へと逃げ出してしまった。

「そうだ、放送室！ きっと、そこにスライムの親玉がいるはず！」

その時、再び大きな悲鳴が聞こえた。それが下のエントランスからだとは察知した彼女は瞬く間に階段を駆け下りると、出入り口を塞ぐかのように大量のスライムが押し寄せている。

既に何人かの女子がその場に追い詰められ、貞操の危機だった。

「マジカル☆ビーム！」

ステッキから光線を出して、スライムが吹き飛んでいく。

「大丈夫！？」

「は、はい。って、後ろ！」

その言葉にマジカル・ブルーが振り向くとスライムが何体も彼女に襲い掛かろうとしていた。光線を出して吹き飛ばす彼女だが、スライム達は次々と融合して天井まで届くほど巨大なサイズに変化した。

「ちょ——」

ビームで体を削りはするが、撃ち抜くまでには至らない。さらに距離を詰めるスライムに、攻撃よりも防御と全方位バリアを張った。

「この隙に次の手を——」

そう考えた時、スライムの向こう側から声がした。

「フヒヒ。判断をミスったな。マジカル・ブルー」

見れば、メガネをかけた中肉中背の男子生徒がエントランスの奥から現れた。ちょうど放送室がその辺りにあるのを見て、彼女はさっと表情を変える。

「あ、あなたはまさか——！」

「そうござる。このスライム達を従えているのは拙者でござるよ」

そう言って、男子はニチャアと気色の悪い笑みを浮かべた。

よく見れば彼の顔は脂ぎったニキビ面で、およそ女子にはモテないような姿をしていた。

「拙者はスライム使い。ある日、女子にいじめられてるところを変な怪人に助けられて、能力を授けられた者なり」

「やっぱり、敵側の人間なのね！ さっさと学校中のスライムを消しなさい！」

「断る！」

ツバを飛ばして言うと、男子生徒は眼鏡の奥の目をぎらつかせた。